

2022年8月

スモールサッカー連盟

●スモールサッカー連盟会員チームの皆さまへ

1) イトウカップとは

イトウカップは2004年度からスタートした学年別スモールゲームのリーグ戦です。低学年を除いて基本的に8人制のゲームで、学年により変化するピッチ(約40m×約30mなど)で行うサッカーゲームです。イトウカップの前身は2003年度より8チームでスタートしたバービーリーグです。

バービーリーグとはアルゼンチンでの7~8人制サッカーの名称です。

何故アルゼンチンのバービーリーグを日本で行うことを考えたのかといいますと、世界的にみると、サッカー先進国では小学生年代で11人制のサッカーは行わず、普通7~8人制のサッカーが行われております。なかでも特に注目したのが、アルゼンチンのスモールサッカーのルールでした。アルゼンチンではストリートサッカー(少年から大人までが居住地の道で楽しんでいたサッカー)が社会環境の変化から、消滅しつつあるのを憂慮し、またストリートサッカーがサッカー選手を、サッカーそのものを育て、支えてきた基本となっているという認識から、なるべくストリートサッカーと同じ状況を再現したルールを作り、それを全国に広め、ストリートサッカーにとって変わるものとして普及を進めていたのです。近年ヨーロッパ諸国でも少人数制のサッカーの普及に力を入れているのが小学生年代サッカーの特徴となっています。スペインでは、日本の中学生年代まで11人制は基本的になく、7人制が原則です。イングランドでは6年生で初めて11人制になり、それまでは、国のサッカー協会(FA)で11人制は禁止され、小学校中学年からは8人制が行われております。その他西欧、特にオランダやチェコ、旧東欧諸国でも同じ傾向にあり、11人制のサッカーは中学生年代からというのが普通です。また使用ボールについても、イングランドでは小4年生まで3号、中学2年生まで4号ボール、中学3年生になってやっと5号ボールとなります。(日本も中学1年生から5号ボールを使い始めたのは、そう昔ではなく、以前は4号ボールでした)ゴールもアルゼンチンでは、イトウカ

ップの使用している 3m ゴール、イングランドでは、それよりちょっと大きな(中学年になると) 3・5m ゴールというように、心身の成長とあわせたシステムとボール使用、またゴールの大きさなどを決定しております。

2) イトウカップの特徴

- ・少人数制サッカーの特徴と同じです。少人数制のサッカーの特徴は、選手がボールに触る回数が多くなる。それによってサッカーの技術的向上がのぞめ、選手のサッカーに対する楽しみも増える。
- ・児童の精神的、肉体的成長と一致する範囲のゲームである。つまり大きなグラウンドは児童の視野の範囲を越え、多人数の人間関係を構築するには児童の人間的熟成度が足りない。またキック力などの身体的能力にも個人差が有りすぎ、広いグラウンドに適応出来ない能力の少年少女も多い。つまり、肉体的な側面と人間的成長過程からみても、選択肢の多過ぎる 11 人制、多人数であるが故に適当に蹴ってもパスが通る偶然など、(それをよしとする) 少年少女に適切ではない。(子供の特徴は小さいものから大きなもの。短い距離から長い距離。具象から抽象。少数から多数という思考過程、構築をする) 小さなグラウンドで出来るので、場所を選ばない。現在の日本ではグラウンドが足りず、いつでも自由にサッカーをする場所がないので、いつでも出来る可能生のあるちいさなグラウンド、校庭を利用できる少人数制サッカーは都会には適合している。

3) イトウカップの主な成果

- ・試合に参加している少年少女たちが純粋にサッカーを楽しめる。
(試合の結果、勝ち負けではなく、皆がボールに触る機会がおおい)
- ・参加者の技術的向上がのぞめる。
(デリケートなボールタッチ、丁寧なパス、正確なシュート等がなければ点が入らない)
- ・各チームの交流がより緊密になり、チームの指導者間で屈託なく話が出来るようになった。3 年生

以上のイトウカップで、試合中に指導者は試合参加している選手に戦術的指導、指示をしてはいけないというルールです。(グラウンドの外から試合をしている選手に「こうしろああしろ」と指示をしてはいけない。(ポジションチェンジや選手交代は別)つまりグラウンドに立って試合をしいるものが主人公という意味です。保護者の方にも指示は自粛していただいております。(ただし 2005 年度からは前期夏休み前まではコーチングは禁止せず、夏以降の後期より禁止になりました)

このようなリーグをより発展させることで、各チームの繋がり、少年たちの交流、保護者の連帯などを進め、より楽しく明るい地域づくりの為に貢献をしたいと考えております。

※2005 年度よりスモールサッカー連盟を設立し、各チームの加盟費と伊東奨学会からの寄付金で運営するようになりました。

☆ 伊東三右衛門翁について

最後に伊東三右衛門杯(イトウカップ)と何故呼称することに決定したかの経緯を説明いたします。伊東三右衛門翁は日本の偉人 100 人に数えられるほどの人物であります。翁の偉業は別紙に書かれたとおりであります。翁が大田区羽田に居住し、その後萩中に居を移し、伊東奨学会を通じて、亡くなるまで多くの青少年の教育、特に大田区の教育について多大な貢献をしてきました。またその志、翁の偉業は現在でも伊東奨学会として引き継がれております。翁の生きかた、人物をより多くの青少年に広げることは、人間の生きかたの教育としても大変意義深いことだと思います。

そこでバービーリーグを設立し実施したのをきっかけに、このリーグをより発展させることと同時に、ただサッカーが巧くなるだけの為ではなく、人間を知ること、先人の賢さや優しさを知ること大切だと考え、2 年目より伊東奨学会に許可を得て、伊東三右衛門杯と呼称することを決定したわけです。

<http://www.zaidanitou.or.jp/>

●財は郷土のために—今も生き続ける伊東夫妻の心

～伊東三右衛門(いとうさんうえもん)伊東南美(いとうなみ)～

伊東三右衛門(いとうさんうえもん)は、明治二十五年(一八九二年)に今の羽田(はねだ)空港のある鈴木新田(すずきしんでん)で生まれました。幼いころの名前を三三雄(みさお)といい、代々酒屋や質屋を営む裕福な家の一人息子として育ちました。その当時、町には小学校がなく、三三雄は、隣村の大森(おおもり)高等小学校に入学します。中学は、自宅から八キロメートルも離れた荏原(えばら)中学校に歩いて通いました。このおかげで、あまり丈夫でなかった体も卒業するころにはすっかりたくましくなり、成績も大変優秀でした。中学校卒業後は、東京高等商科学校(今の一橋(ひとつばし)大学)に進学しますが、そこで「少年よ大志(たいし)を抱け」といったクラーク博士の弟子(でし)、内村鑑三(うちむらかんぞう)と出会います。この出会いこそが、その後の三三雄の人生を大きく方向付けることとなったのです。「人は学問や文化に等しくふれ、等しく幸せになる権利がある」と説く鑑三に、三三雄は自分が育った羽田の人々への思いをはせました。当時、羽田に暮らす人々は、水道もなく学問とは縁(えん)遠い生活を続けていました。「私たちが死ぬときは、自身が生まれたときより世の中を少しでもよくして、財のある者は事業をして役立ち、財のない者は教師となって思想を人に残すことが大切です」という鑑三の教えを理解はできても、三三雄はまだそのために自分が行動を起こすことまではしませんでした。華やかな一生でなく、平凡な生涯をおくりたいと考えていたのです。「まじめで一生懸命な生涯こそ、後世に残す最大の遺物(いぶつ)です」鑑三の一言に、三三雄は大きく共鳴(きょうめい)します。三三雄は、大学卒業後に三井(みつい)銀行に就職します。その翌年には、埼玉県出身の加藤南美(かとうなみ)と結婚しますが、妻の南美は東京の立教女学院(りっきょうじょがくいん)を経て大妻技芸学校(おおつまぎげいがっこう)を卒業した才能のある女性でした。南美は、お花やお茶をたしなみ、俳句集も出版するなど、とても優秀な人で、几帳面(きちょうめん)で質素、儉約家(けんやくか)であるなど、三三雄と似通(にかよ)った女性でした。三十四歳のとき、三三雄は父親の跡を継ぎ五代目伊東三右衛門となります。三年後には地元羽田で経理士事務所を開設しますが、子どもに恵

まれなかった三三雄は、近所の子どもたちの世話をしたり、身寄りのない子どもを預かったりしました。昭和十二年（一九三七年）の日中戦争に端（たん）を発した第二次世界大戦がますます激しくなっていくなか、三右衛門は、会館を建設して町会に寄付（きふ）するなど町の中心的人物となります。戦時下の子どもたちは、空襲（くうしゅう）から命を守るために親と別れて疎開（そかい）し、人々は苦しい生活をじっと我慢（がまん）して送っていました。

この苦しい人々の暮らしぶりを見ていた三右衛門は、「軍に献金（けんきん）して戦車や戦闘機をつくれれば華やかかもしれないが、伊東家の財産はすべて町の人々がいたからこそ蓄えられたものだ。決めたぞ！すべての財産を町のために使おう」と固く決意したのです。そのような固い決意によって実現したのが伊東奨学会（いとうしょうがくかい）です。子どもたちの教育や、地元の人たちの文化を発展させることを目的に昭和十九年（一九四四年）九月に設立されました。まさに戦争の終わる一年前のできごとでした。当時は教育機関の公費が少なく、多くの学校が伊東奨学会の寄付を大歓迎しました。伊東奨学会は、戦後の教育向上に大きく貢献（こうけん）したのです。昭和三十五年（一九六〇年）、三右衛門は六十八歳で亡くなります。妻の南美は遺言（ゆいごん）を守って、何とか自分一人が生活できるだけの資産を残し、すべてを伊東奨学会に寄付（きふ）します。その後、昭和四十六年（一九七一年）に南美も亡くなりますが、遺志（いし）によりすべての財産が伊東奨学会に贈られました。創立以来、財団法人伊東奨学会の活動は、戦後の貧しい教育環境のなかで、多くの役目を果たしてきました。そして、創立から半世紀が過ぎた今でも、三右衛門夫妻の意志を受け継いで、社会教育や学術振興（しんこう）、文化の向上のためにさまざまな団体に寄付をしています。財産は郷土の資産として永遠に継承（けいしょう）されることを願った、三右衛門と南美の心は今も羽田に生き続けています。

【出典、参考文献】

「財団法人伊東奨学会五十年史」／「伊東三右衛門伝さえむさん」財団法人伊東奨学会より